

189 浮世絵による東京観光案内（その1）（2023年8月29日）

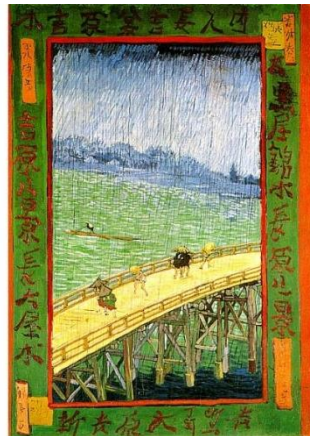
19世紀後半のジャポニズムの時代に、葛飾北斎（1760-1849）の「富嶽三十六景」や歌川広重（1797-1858）の「東海道五十三次」の浮世絵の連作がヨーロッパの芸術家に様々な影響を与えたことは、これまでに何度かご紹介しました。これらのほかに、有名な浮世絵シリーズとして広重の「名所江戸百景」があります。これは、広重の晩年の代表作で、春夏秋冬に分けて江戸の景色や人々を描いた119枚の浮世絵の連作です。このような各地の名所を描いた浮世絵は、現代のガイドブックの役割を果たしていました。広重は、「名所江戸百景」で、大胆な構図と鮮やかな色彩によって、当時の人々の日常生活を生き生きと描写しました。今回は、広重が描いた江戸の風景をいくつか見ていきます。

浮世絵から強い影響を受けたフィンセント・ファン・ゴッホ（1853-1890）が、「名所江戸百景」の「亀戸梅屋敷」と「大はしあたけ夕立」を模写したことは広く知られています。「亀戸梅屋敷」（左上が広重の作品で、がゴッホによる模写）は、現在の東京都江東区にある亀戸天神社の梅の木を描いたものです。広重は、この連作の中で「亀戸天神境内」（ゴッホの作品の右）も描きました。この作品に描かれている藤の花は、梅と並んで、現在でも亀戸天神社の見どころとなっています。



「大はしあたけ夕立」（左下が広重、中央下がゴッホ）に描かれている川は、隅田川です。隅田川は、東京都の東部を縦断して東京湾へ流れる川です。橋の姿や交通手段は変わっても、橋が人々の往来を支えているのは、今も昔も変わりません。広重は「両国花火」（ゴッホの作品の右）も描きました。18世紀に始まった隅田川の花火大会は、現在でも夏の風物詩として有名なイベントで、テレビ中継されます。今年は4年ぶりに開催され、100万人以上の人出がありました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



ゴッホと同じく、クロード・モネ（1840-1926）も浮世絵をコレクションしていました。コレクションの中に「浅草田圃酉の町詣」（写真右）があります。吉原の遊郭の中から、猫が浅草の田んぼを見ています。背景には、富士山と酉の市と呼ばれるお祭りの日に神社を訪れる人々が小さく描かれています。現在の浅草には田んぼはありませんが、浅草は今でも人気の観光地です。広重は、吉原の遊女を描かずに、遊女が飼い主と思われる猫を描きました。猫の後ろ姿が、華やかな遊郭で暮らす遊女の物悲しさを表しているように見え、この連作の中で他とは雰囲気の違う作品です。

